

博士論文（要約）

論文題目 琉球・日本の外交と文化交流

氏名 屋良 健一郎

目次

序章 研究史の整理と本稿の構成

はじめに

- 一 古琉球史研究の動向
- 二 近世琉球史研究の動向
- 三 本稿の構成

第一部 琉球・薩摩海域の諸相

第一章 中世後期の種子島・薩摩・琉球

はじめに

- 一 種子島の地理的特質と種子島氏の活動
- 二 十六世紀前半の南九州情勢と種子島氏
- 三 種子島氏と琉球

おわりに

第二章 近世琉球と種子島の交流

はじめに

- 一 近世の種子島氏と琉球
- 二 「新古見聞記」の琉球情報

おわりに

第三章 種子島への琉球船・唐船の漂着・破船

はじめに

- 一 琉球船の破船
- 二 唐船の漂着・破船
- 三 中世の唐船漂着・破船

おわりに

第二部 琉球・日本の文化交流

第一章 琉球辞令書の様式変化に関する考察

はじめに

- 一 古琉球の官人と文字
- 二 古琉球辞令書に関する考察
- 三 辞令書の様式変化の背景
- 四 漢字表記と仮名表記
- 五 琉球の文書作成者

おわりに

第二章 琉球人と和歌

はじめに

- 一 古琉球の和歌受容
- 二 近世琉球の和歌受容
- 三 琉球人の和歌表現
- 四 「うるま」化する琉球
- 五 おわりに

第三章 近世琉球の日本文化受容

はじめに

- 一 古琉球の状況
 - 二 十七世紀の琉球
 - 三 琉球の中国化
 - 四 士族たちの日本文化受容
- おわりに

終章 本稿のまとめと今後の課題

本文

五年以内に出版予定。

なお、第一部第二章第三章については、インターネット公表に対する著作権者からの許諾が得られていない。

参考文献一覧

- 赤嶺守『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』（講談社、二〇〇四年）
- 麻生伸一「近世中後期の贈与儀礼にみる琉球と日本 一琉球国王・薩摩藩主・江戸幕府将軍の関係をめぐる一」『日本史研究』第五七八号（二〇一〇年）
- 麻生伸一「一八世紀中期における琉球の漢字・漢文および書札札の学習について」『沖縄芸術の科学』第二七号（二〇一五年）
- 安良城盛昭『新・沖縄史論』（沖縄タイムス社、一九八〇年）
- 荒木和憲「一五・一六世紀の島津氏一琉球関係」『九州史学』第一四四号（二〇〇六年）
- 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、一九八八年）
- 生田滋「フェルナン・メンデスピント著『東洋遍歴記』に見える雙嶼、琉球関係記事と明代中琉関係の変化」『第九回 琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』（沖縄県教育委員会、二〇一一年）
- 板谷徹「家譜にみられる芸能資料3 薩摩上国」『ムーサ』一〇（二〇〇九年）
- 伊川健二『大航海時代の東アジア一日欧通交の歴史的的前提一』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- 池野茂「琉球山原船水運を担った船舶を中心に」柚木学編『日本水上交通史論集第五卷 九州水上交通史』（文献出版、一九九三年）
- 池宮正治『近世沖縄の肖像 上』（ひるぎ社、一九八二年）
- 池宮正治『近世沖縄の肖像 下』（ひるぎ社、一九八二年）
- 池宮正治「和文学の流れ」『新琉球史 近世編（下）』（琉球新報社、一九九〇年）
- 池宮正治「王朝の文芸一首里城と城下の面影」首里城復元期成会編『甦る首里城 歴史と復元』（首里城復元期成会、一九九三年）
- 池宮正治「毛起竜（識名盛命）『思出草』一翻刻と注釈一」『日本東洋文化論集』第八号（二〇〇二年）
- 池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学一東アジアからのまなざし一』（三弥井書店、二〇一〇年）
- 石井正敏「史料紹介 肥後守祐昌様琉球御渡海日記」『南島史学』二八号（一九八六年）
- 伊集守道「戦国期本田氏地域権力化の一側面一近衛家との交流を中心に一」『富山史壇』一五五（二〇〇八年）
- 伊藤幸司「日琉間交流と禅宗」『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、二〇〇二年）
- 伊藤幸司「大内氏の琉球通交」『年報中世史研究』第二八号（二〇〇三年）
- 伊波普猷『伊波普猷全集 第一巻』（平凡社、一九七四年）
- 伊波普猷『伊波普猷全集 第七巻』（平凡社、一九七五年）
- 上里隆史「古琉球・那覇の「倭人」居留地と環シナ海世界」『史学雑誌』一一四一七（二〇〇五年）
- 上里隆史『琉日戦争一六〇九 島津氏の琉球侵攻』（ボーダーインク、二〇〇九年）
- 上里隆史『海の王国・琉球一「海域アジア」屈指の交易国家の実像』（洋泉社、二〇一二年）
- 上里隆史『人をおるく 尚氏と首里城』（吉川弘文館、二〇一六年）
- 上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』（吉川弘文館、二〇〇一年）
- 上江洲敏夫「辞令書の古文書学的考察」『沖縄文化財調査報告書第十八集 辞令書等古文書

- 調査報告書』(沖縄県教育委員会、一九七九年)
- 上江洲敏夫「辞令書等古文書調査報告補遺(二)」『沖縄県立博物館紀要』第十号(一九八四年)
- 内田晶子・高瀬恭子・池谷望子『アジアの海の古琉球 一東南アジア・朝鮮・中国一』(榕樹書林、二〇〇九年)
- 梅木哲人「評定所の機構と評定所文書」『琉球王国評定所文書 第四卷』(浦添市教育委員会、一九九〇年)
- 大石虎之助『種子島の歴史考』(ぶどうの木出版、二〇〇三年)
- 大内初夫『近世の俳諧と俳壇と』(和泉書院、一九九四年)
- 大山智美「戦国大名島津氏の権力形成過程—島津貴久の家督継承と官途拝領を中心に—」『比較社会文化研究』第二五号(二〇〇九年)
- 鹿毛敏夫『戦国大名の外交と都市・流通』(思文閣出版、二〇〇六年)
- 鏑武彦「琉球使節による和歌の詠作—読谷山王子朝恒の例を中心に—」『立教大学日本学研究所年報』第十二号(二〇一四年)
- 鏑武彦「和歌における琉球と薩摩の交流」鈴木彰・林匡編『島津重豪と薩摩の学問・文化』(勉誠出版、二〇一五年)
- 嘉手苺千鶴子『おもろと琉歌の世界 交響する琉球文学』(森話社、二〇〇三年)
- 金井静香「中世末期における近衛家と島津氏の交流—近衛政家・尚通・植家」科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書『近世薩摩における大名文化の総合的研究』(二〇〇三年)
- 金指正三『近世海難救助制度の研究』(吉川弘文館、一九六八年)
- 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房、一九九〇年)
- 紙屋敦之「薩摩の琉球侵入」『新琉球史 一近世編(上)一』(琉球新報社、一九八九年)
- 紙屋敦之『歴史のはざまを読む—薩摩と琉球』(榕樹書林、二〇〇九年)
- 紙屋敦之『東アジアのなかの琉球と薩摩藩』(校倉書房、二〇一三年)
- 川添昭二『中世文芸の地方史』(平凡社、一九八二年)
- 川添昭二『中世九州の政治・文化史』(海鳥社、二〇〇三年)
- 喜舎場一隆「琉球における茶道」『九州文化史研究所紀要』第三十五号(一九九〇年)
- 喜舎場一隆『近世薩琉関係史の研究』(国書刊行会、一九九三年)
- 金城正篤「冊封体制と久米村」池宮正治・小渡清孝・田名真之編『久米村—歴史と人物—』(ひるぎ社、一九九三年)
- 久曾神昇『校本八雲御抄とその研究』(パルトス社、一九九七年)
- 久保田淳「平安後期和歌における異国」樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』(笠間書院、一九九七年)
- 黒木國泰「近世日向漂着唐船情報の伝達・管理システム」『宮崎女子短期大学紀要』二六(二〇〇〇年)
- 胡桃沢勘司『近世海運民俗史研究 一逆流 海上の道一』(芙蓉書房出版、二〇一二年)
- 黒嶋敏「織田信長と島津義久」『日本歴史』七四一号(二〇一〇年)
- 黒嶋敏「琉球王家由緒と源為朝」歴史学研究会編『由緒の比較史』(青木書店、二〇一〇年)
- 黒嶋敏『中世の権力と列島』(高志書院、二〇一二年)
- 小嶋惇・村上潔「九州・沖縄海域における黒潮の流路変動」『側候時報』第七七卷(二〇一

〇年)

- 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(刀江書院、一九六九年)
- 小葉田淳『増補中世南島通交貿易史の研究』(臨川書店、一九九三年)
- 五味克夫「名越氏と肥後氏」『中世史研究会会報』三〇(一九七一年)
- 五味克夫「鉄砲伝来一特に種子島家譜を中心にして一」『黎明館開館一〇周年記念特別展 鉄砲伝来四五〇年』(鹿児島県歴史資料センター黎明館、一九九三年)
- 五味克夫「『御文書有物套』と『種子島正統系図』・『種子島男爵家文書』」『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四』附録(鹿児島県、一九九四年)
- 佐伯弘次「室町前期の日琉関係と外交文書」『九州史学』一一一号(一九九四年)
- 佐伯弘次「十五世紀後半以降の博多貿易商人の動向」『東アジアと日本—交流と変容—』第二号(二〇〇五年)
- 佐佐木信綱『近世和歌史』(博文館、一九二三年)
- 塩満郁夫・友野春久編『新たな発見に会う 鹿児島城下絵図散歩』(高城書房、二〇〇四年)
- 島村幸一「袋中のみた古琉球」『沖縄県史 各論編第三卷 古琉球』(沖縄県教育委員会、二〇一〇年)
- 島村幸一「琉球船、土佐漂着史料にみる日本文芸の享受」『立正大学国語国文』第四六号(二〇〇八年)
- 島村幸一「琉球和文学の背景—『永峯和文』の筆者、「船頭雇長峰」にふれて—」『立正大学人文科学研究所年報』第五二号(二〇一五年)
- 清水紘一「日欧交渉の起源」『中央大学百周年記念論文集 文学部』(中央大学、一九八五年)
- 清水紘一『日欧交渉の起源』(岩田書院、二〇〇八年)
- 首里城研究グループ編『首里城入門 その建築と歴史』(ひるぎ社、一九九二年)
- 関周一「唐物の流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告』第九二集(二〇〇二年)
- 平良妙子「冊封使節来琉時における詩文交流—『渡琉日記』を中心に—」『東洋学』第九四号(二〇〇五年)
- 高梨真行「將軍足利義輝の側近衆—外戚近衛一族と門跡の活動—」『立正史学』第八四号、(一九九八年)
- 高良倉吉『琉球王国の構造』(吉川弘文館、一九八七年)
- 高良倉吉「近世琉球への誘い」(『新琉球史 一近世編(上)一』琉球新報社、一九八九年)
- 高良倉吉「新発見の古琉球辞令書について」『浦添市立図書館紀要』(第二号、一九九〇年)
- 高良倉吉「近世琉球辞令書とその概況」仲松弥秀先生傘寿記念論文集刊行委員会編『神・村・人 一琉球弧論叢一』(第一書房、一九九一年)
- 高良倉吉『琉球王国』(岩波書店、一九九三年)
- 高良倉吉『琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』(筑摩書房、二〇一二年。初出一九八〇年)
- 高良倉吉『琉球王国史の探究』(榕樹書林、二〇一一年)
- 田名真之『南島地名考 おもろから沖縄市誕生まで』(ひるぎ社、一九八四年)
- 田名真之『沖縄近世史の諸相』(ひるぎ社、一九九二年)
- 田名真之「自立への模索」豊見山和行編『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』(吉川

- 弘文館、二〇〇三年)
- 田中健夫『対外関係と文化交流』(思文閣出版、一九九一年)
- 知名定寛『琉球仏教史の研究』(榕樹書林、二〇〇八年)
- 津田修造「山本春正の薩摩下向及び薩摩歌壇と長嘯子門との交流について」吉田幸一編『長嘯子新集 中』(古典文庫、一九九三年)
- 津田修造「山本春正年譜稿(上)」『鹿児島国語国文』創刊号(一九九七年)
- 津田修造「山本春正年譜稿(下)」『甲南紀要』第二三号(一九九八年)
- 津田修造「薩摩の歌人「諏訪兼利」について」『国語鹿児島』第四六号(二〇〇九年)
- 唐曉峰「明・清時代の北京城の都市計画と構成配置のもつ意味」千田稔編『東アジアの都市形態と文明史』(国際日本文化研究センター、二〇〇四年)
- 徳永和喜『薩摩藩対外交渉史の研究』(九州大学出版会、二〇〇五年)
- 所莊吉『火繩銃 改訂版』(雄山閣、一九八九年)
- 渡名喜明「沖縄文化の一側面—近世琉球におけるいけばなの受容を巡って—」山本弘文先生還暦記念論集刊行委員会編『琉球の歴史と文化 山本弘文博士還暦記念論集』(本邦書籍、一九八五年)
- 富田正弘「琉球国発給文書と竹紙」『東京大学史料編纂所研究紀要』第一七号(二〇〇七年)
- 豊見山和行「琉球国の地域的構造について」帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集『中世日本列島の地域性—考古学と中世史研究6—』(名著出版、一九九七年)
- 豊見山和行『琉球王国の外交と王権』(吉川弘文館、二〇〇四年)
- 豊見山和行「『近世琉球』という時代」『沖縄県史 各論編 第四巻 近世』(沖縄県教育委員会、二〇〇五年)
- 豊見山和行「近世琉球の政治構造について 一言上写・僉議・規模帳等を中心に—」西村昌也他編『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」』(二〇一二年)
- 豊見山和行「島津氏の琉球侵略と琉球海域の変容」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係5 地球的世界の成立』(吉川弘文館、二〇一三年)
- 中澤伸弘「近世後期琉球と和歌の受容」『神道宗教』一九七(二〇〇五年)
- 中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引 影印篇』(風間書房、一九七〇年)
- 中本正智「おもしろ仮名遣の源流」山本弘文先生還暦記念論集刊行委員会編『琉球の歴史と文化』(本邦書籍、一九八五年)
- 永山修一「中世日本の琉球観」『沖縄県史 各論編第三巻 古琉球』(沖縄県教育委員会、二〇一〇年)
- 那覇市文化局歴史資料室編『詩歌集 那覇を詠う』(那覇市、一九九七年)
- 新島奈津子「古琉球における那覇港湾機能—国の港としての那覇港—」『専修史学』三九号(二〇〇五年)
- 新名一仁「嘉吉・文安の島津氏内訌—南九州政治史上の意義—」『史学研究』二三五号(二〇〇二年)
- 新名一仁「三宅国秀・今岡通詮の琉球渡航計画をめぐる諸問題—南九州政治史の視点から—」『九州史学』一四四(二〇〇六年)
- 西村時彦『南島偉功伝』(誠之堂書店、一八九九年)
- 橋本雄『中世日本の国際関係—東アジア通交圏と偽使問題—』(吉川弘文館、二〇〇五年)

- 橋本雄『中華幻想 唐物と外交の室町時代史』（勉誠出版、二〇一一年）
- 波多江種一『称名墓志より見たる薩摩歌壇の研究』（一九三四年）
- 林匡「戦国期の大隅国守護代本田氏と近衛家」『黎明館調査研究報告』第一八集（二〇〇五年）
- 春名徹「近世東アジアにおける漂流民送還体制の形成」『調布日本文化』四（一九九四年）
- 東恩納寛惇『東恩納寛惇全集1』（第一書房、一九七八年）
- 東恩納寛惇『東恩納寛惇全集2』（第一書房、一九七八年）
- 東恩納寛惇『東恩納寛惇全集5』（第一書房、一九七八年）
- 東恩納寛惇『東恩納寛惇全集7』（第一書房、一九八〇年）
- 深瀬公一郎「近世日琉通交における鹿児島琉球館」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四分冊四八（二〇〇二年）
- 深瀬公一郎「近世琉球における大和旅経験」『風俗史学』五二号（二〇一三年）
- 福島金治『戦国大名島津氏の領国形成』（吉川弘文館、一九八八年）
- 福島金治「戦国島津氏琉球渡海印判状と船頭・廻船衆」有光友学編『戦国期印章・印判状の研究』（岩田書院、二〇〇六年）
- 洞富雄『鉄砲 伝来とその影響』（思文閣出版、一九九一年）
- 真栄平房昭「十五・十六世紀における琉球＝東南アジア貿易の歴史的位置」『琉大史学』一二（一九八一年）
- 真栄平房昭「鎖国形成期の琉球在番奉行」山本弘文先生還暦記念論集刊行委員会編『琉球の歴史と文化』（本邦書籍、一九八五年）
- 真栄平房昭「海外情報と久米村」池宮正治・小渡清孝・田名真之編『久米村一歴史と人物一』（ひるぎ社、一九九三年）
- 真栄平房昭「近世の航海信仰と種子島船」『がじゅまる通信』No.33（二〇〇三年）
- 真栄平房昭「清代中国における海賊問題と琉球 一海域史研究の一視点一」『東洋史研究』六三一三（二〇〇四年）
- 真栄平房昭「琉球海域における交流の諸相 一海運・流通史の視点から一」『沖縄県史 各論編第四巻 近世』（沖縄県教育委員会、二〇〇五年）
- 真栄平房昭「琉球王国に伝来した中国絵画 一唐物の輸入と王権をめぐる視点一」『沖縄文化』第一〇〇号（二〇〇六年）
- 真栄平房昭「海域交流史からみた琉球弧 一ヒト・モノ・海事信仰の伝播をめぐって一」国立歴史民俗博物館・松尾恒一編『琉球弧 一海洋をめぐるモノ・人、文化一』（岩田書院、二〇一二年）
- 真境名安興『沖縄教育史要』（沖縄書籍販売社、一九六五年）
- 真境名安興『沖縄一千年史』（琉球新報社、一九七四年）
- 増村宏「種子島家譜について」『鹿児島大学文学部研究紀要 文科報告』第三号（一九五四年）
- 三木靖『戦国史叢書10 薩摩島津氏』（新人物往来社、一九七二年）
- 三木靖「屋久島における中世城郭の研究—中世社会の変遷と、楠川城の築城を主にして—」『南日本文化』第二十九号（一九九六年）
- 水野哲雄「島津氏の自己認識と氏姓」九州史学研究会編『境界のアイデンティティ』（岩田

- 書院、二〇〇八年)
- 宮本義己「室町幕府と琉球使節—琉球船貢物点検問題の実相とその意義—」『南島史学』第
四五号 (一九九五年)
- 宮脇さゆり「中世種子島における法華改宗について」『隼人文化』二六 (一九九三年)
- 村井章介『アジアのなかの中世日本』(校倉書房、一九八八年)
- 村井章介『東アジア往還 漢詩と外交』(朝日新聞社、一九九五年)
- 村井章介「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』
(山川出版社、一九九七年)
- 村井章介『日本中世境界史論』(岩波書店、二〇一三年)
- 桃木至朗『海域アジア史研究入門』(岩波書店、二〇〇八年)
- 矢野美紗子『古琉球期首里王府の研究』(校倉書房、二〇一四年)
- 山口研一「織豊期島津氏の権力構造—御一家衆北郷氏を題材として—」『史友』第一七号 (一
九八五年)
- 山口研一「戦国期島津氏の家督相続と老中制」『青山学院大学文学部紀要』第二八号 (一九
八七年)
- 山下真一「中近世移行期の種子島氏—島津氏の権力編成との関連で—」『日本歴史』第六九
四号 (二〇〇六年)
- 屋良健一郎「天文七・八年の種子島氏と島津氏」『法政大学沖縄文化研究所所報』第七〇号
(二〇一二年)
- 湯川敏治「足利義晴将軍期の近衛家の動向—種家と妹義晴室を中心に—」『日本歴史』六〇
四号 (一九九八年)
- 渡辺美季「三人の「琉球人」—史料を読む—」勝方=稲福恵子・前嵩西一馬編『沖縄学入
門—空腹の作法—』(昭和堂、二〇一〇年)
- 渡辺美季「鄭秉哲の唐旅・大和旅—皇帝と話をした琉球人」村井章介・三谷博編『琉球か
らみた世界史』(山川出版社、二〇一一年)
- 渡辺美季『近世琉球と中日関係』(吉川弘文館、二〇一二年)
- 横山學『琉球国使節渡来の研究』(吉川弘文館、一九八七年)

論文の内容の要旨

本稿は、琉球と薩摩・日本との外交および文化交流の諸相を明らかにするものである。

第一部「琉球・薩摩海域の諸相」では、琉球・薩摩及び両地域の間に広がる海域で展開された外交や交流について考察した。

第一章「中世後期の種子島・薩摩・琉球」では、中世後期の種子島氏の琉球・薩摩海域における位置づけを試みた。種子島氏は、島津氏の合戦に参加することで南島への支配を確立していったが、そのことは種子島氏に唐船などとの接触や琉球貿易の機会をもたらした。さらに、十五世紀後半の法華宗改宗後には畿内と種子島とを往来するヒトの流れが増加した。そのような状況下、種子島氏は入手した唐物を京都の公家や武将に贈り、畿内とのつながりを強めていった。なお、畿内から来島した人物を積極的に家臣として登用していたことも注目される。このようにして形成された種子島と京都とのつながりは、島津氏にとっても利用価値のあるものだった。すなわち、本宗家の家督を奪取した相州家が天文二十一年（一五五二）の島津貴久の修理大夫任官を実現した際には、この種子島氏と京都とのつながりが利用されたと考えられるのである。種子島氏は、京都とのつながりの深さや鉄砲に関する知識・技術の保有を背景に、島津氏との交流を維持したが、島津氏が絶対的な存在というわけではなく、他の領主とも積極的に交流を持っていた。

一方、十六世紀の琉球王国では、尚真王の治世下、自国を周辺の島々より上位と見なす意識が生まれていた。琉球王国が懐いていた、琉球を中心とする秩序の中に、貿易のために使者を派遣していた種子島氏も位置づけられることになる。種子島氏は琉球の秩序に包摂されることで貿易を続けていたと言える。なお、種子島忠時の琉球貿易の背景には、日明貿易を展開する細川高国との提携により、細川氏が明へもたらす商品を琉球から入手する狙いがあったと考えられる。大内義隆による天文十一年（一五四二）の種子島船への妨害工作も、細川晴元の遣明船派遣を妨害しようとしたという観点から見直されるべきであろう。

種子島氏は、海外貿易を行う勢力にとって重要な地点を支配しており、その特質を背景に、周辺の勢力と幅広い交渉を持っていたのである。島津氏の合戦への参加を島津氏から「忠節」と位置付けられ、琉球への貿易船派遣を琉球から「忠節」と見なされていた。この二つの「忠節」により、種子島氏の南島知行は維持され、日本の諸勢力の対琉球貿易の上でも大きな役割を担うことができたのである。

しかし、そのような種子島氏も、島津氏の支配下に入り、薩摩藩の家老として近世を迎えることとなる。その近世の種子島氏と琉球の交流を第二章「近世琉球と種子島の交流」でとりあげた。十七世紀後半から十八世紀前半にかけての当主である種子島久時と種子島久基の時代に種子島と琉球との交流が盛んに行われていた。久時が薩摩藩の家老として江戸上りに随行する役割を担っており、久基もまた「監琉球」の役（琉球方）を担っていたということが種子島と琉球の交流の背景にあるだろう。それに加え、漂着民の送還による礼物の贈答も両者の間にはまま見られた。また、種子島の家臣が記した「新古見聞記」には、十八世紀末～十九世紀初頭の種子島家家臣と鹿児島滞在中の琉球人の交流や、種子島家家臣が琉球人から得た海外情報が記されていた。種子島・琉球間で活動した船頭の様子も垣間見ることができる。

さらに、第三章「種子島への琉球船・唐船の漂着・破船」では、種子島に漂着、あるいは破

船した琉球船と唐船への対応を見た。琉球船への対応は、唐船へのそれと類似した点も確認されたが、琉球人は唐人ほど厳しく島民から隔離されていたとは考えられず、この対応の違いに「異国」としての琉球の性格が表れているように思われる。近世の種子島に対し、鹿児島側には抜荷への警戒心があった。琉球・薩摩海域の重要な寄港地であるという特徴、種子島の船頭が琉球・薩摩間を往来していたこと、破船しない限り鹿児島役人が種子島に来ることはなかったという漂着船への対応のありかた、などが種子島で抜荷が盛んに行われた背景として考えられる。

以上のような第一部の論考により、琉球・薩摩海域の人々の活動の一端が明らかになったと考える。しかしながら、今回は「新古見聞記」などこれまで注目されてこなかった史料を紹介するに留まり、深い考察にまでは至ることができなかった。種子島以外の地域、島津氏家臣のもとに残る史料も博捜することに加え、収集した史料の考察を深めることが今後の課題である。

第二部「琉球・日本の文化交流」では、日本の文化や価値観を琉球人がどのように受容し、内在化していったのかを考察した。

第一章「琉球辞令書の様式変化に関する考察」では、従来、古琉球辞令書、過渡期辞令書、近世琉球辞令書の三つに分類されていた辞令書を、古琉球辞令書、過渡期Ⅰ型辞令書、過渡期Ⅱ型辞令書、近世琉球辞令書の四つに分類し、それぞれの変化の背景を考察した。古琉球辞令書から過渡期Ⅰ型辞令書への変化の時期には、島津家に対して出される琉球の文書も様式が変化し、全体的に、琉球の文書様式が「日本化」したものと考えられる。その背景には、菊隠という日本の事情に詳しい僧が外交文書作成を主導したこととの関連性が想起される。そして菊隠の隠居に合わせるかのように、過渡期Ⅱ型辞令書が登場する。過渡期Ⅱ型はⅠ型と比べると古琉球辞令書に近く、古琉球への揺り戻しと捉えられる。

また、辞令書を含む琉球の文書を作成していた役職についても考察した。十七世紀前半の琉球には「手判書」「御手判書」「状書」「御状書」といった職名が見られる。これらは十七世紀後半に「評定所筆者」と「御右筆」に再編されるが、そこに至る過程で、琉球人による書札礼の習得が進んでいた。すなわち、評定所筆者や御右筆といった職の整備は、日本の書札礼を習得した琉球人の独力での文書作成のスタートであった。そして辞令書の作成業務は納殿から御右筆へ移される。書札礼を習得した御右筆によって作成されることで、辞令書は日本同様、完全な漢字表記の公文書へと変化を遂げたものと考えられる。

このように、島津侵攻後の琉球では、「日本化」が進み、漢字による文書作成が一般的になっていった。そのような状況に対応するため、禅僧や日本から渡来してきた人達に頼るのではなく、琉球人自らによる「日本的」な文書作成が必要となり、書札礼の習得や文書作成職の整備が促されたのだと考えられる。

第二章「琉球人と和歌」では、琉球の和歌受容の歴史と琉球人の和歌表現を研究対象とした。古琉球期の状況については不明な点が多いが、琉球人が畿内の文化人に添削を依頼していたであろうこと、琉球人が対日外交の場で和歌に触れていたこと、上級官人や日本から渡来してきた人々などの一部の間で和歌は詠まれていたであろうこと、を推論した。

一方、島津氏の侵攻後、和歌が幅広く受容されていく中で、十七世紀後半以降は琉球人の中に他の琉球人の和歌の師となる人物も登場したことを確認した。しかし、琉球人が琉球人を師とする形は安定したものではなく、近世の史料からは、師とすべき人物が琉球国内にいないといった状況が読み取れる。そのため、琉球人が和歌を学ぶにあたっては薩摩藩士との子弟関

係が不可欠だったのである。また、表現面では、琉球国内で詠まれた和歌には、琉球語や琉球の地名が詠み込まれることがあったことを指摘した。意外にも琉球人は独自の表現を模索していたのである。

加えて、もともと鬱陵島を指す語であった「うるま」がどのような経緯で琉球の別名となったのかを推論した。「うるま」は、言葉が通じないというニュアンスを持つ語句だが、琉球人は和歌を巧みに詠むことで、そのような「うるま」のイメージを裏切っていた。しかし、それは同時に、日本側の「化服」の表れというふうにとらえられることにもつながった。

以上の考察により、琉球人の和歌習得の在り方が明らかになると共に、琉球人の自己認識、日本側の琉球認識の一端を垣間見ることができる。すなわち、琉球人は江戸立の際に和歌を巧みに詠むことで、「うるま」としての矜持を持ち、一方の日本はそのような琉球を見て、異国を従える国としての自負を高めていったと考えられるのである。

第三章「近世琉球の日本文化受容」では、日本由来の文芸・芸能を琉球人がどのように受容していったのかを見た。古琉球の時代、琉球王国は日本から渡来した人物を積極的に登用しており、堺出身の喜安蕃元の例にも見られるように、茶道のような日本の文化についてはその傾向が強かったと思われる。島津氏の侵攻後、日本から琉球への自由な渡海が制限される一方、薩摩藩士との交流の頻度が増えたことで、日本の文化は琉球士族の重要な嗜みになっていった。

十八世紀の琉球は「中国化」が進んだ時期として知られるが、一方では、多くの和文が記され、立花や茶道がさかんになった時期であった。その背景には、首里王府による日本文化の奨励があった。「中国化」が強調されがちな近世琉球ではあるが、同時に日本文化の受容が進み、それらが士族たちの間に広がっていたことも見過ごしてはならない。

第二部で見てきたように、近世の琉球士族は日本から伝わってきた文化を積極的に受容しており、そのことを誇るような意識も見られた。琉球士族の意識の中で日本文化の存在感が増してきているととれる。しかしながら、本稿では、あくまで日本・薩摩から習得した文化に限って検討したに過ぎない。中国文化の受容の様相も検討した上で、日本文化受容の意義を「中国化」の時代の中にきちんと位置付けることが今後の課題である。